これに対して社会は論弁を用いず、自分の状態についてもつ感情を一般化することができる。こうして社会がおかれている解体の状態を表現する意気消沈の潮流が生れてくる。その状態が外部に表われたのが社会的連帯の弛緩でいわゆるアノミーの問題なのであるが、それは一種の具体的無力状態である。こう状態が生じると新らしい形而上学や宗教体系が現れてこうした無力的な感情を定式だけのものとし、人びとに対して人生に意味や意義はなく、人生に意義を結びつけようとすることは謝りであると証明しようとするのである。ここでデュルケームは「方法論」の中でその端緒がのべられている考え方の延長線上に立って宗教や道徳などは社会の一部の集団ではな全体の表現であるとくりかえし、しかも集合意識は先天的に感情的なもの（a priori affectif）として示されるのである。[42] G. Namer はこの点においてデュルケームが M. Scheler の見解の先駆者であり、宗教体系、哲学体系、道徳体系は集合的感情の第二次的な合理化であると主張する。[43] 集合意識の a priori affectif は道徳的、哲学的などの認知的体系の起源であり、「方法論」において明らかにされた創造的、力動的な面、すなわち集合意識の自由な潮流を特徴づけることになる。[44]

G. Namer はこうしてデュルケームの著作の多くにわたってそられの書かれた年代順に吟味をすすめていく。それで「社会主義」[45] においては集合的基体と集合的思惟または集合意識を結びつける歩みを明かにしていく。そして「哲学と社会学」に収められている論文「個人的表象と集合的表象」（1899）では集合表象が社会的基体 substrat social[46] によって立体的に決定されるが[48]同時に同じ論文の中でデュルケームは集合表象の体系が相対的に自立性をもち、水平的に他の表象体系によって決定されるとも見ている。[47] とくにそのことは宗教の発展の中において見られるのである。これに対して「社会学講義」においては人口の基礎による観念の水平的決定が明白に主張されている。こうして1901－1903頃、理論的危機が用意されていた。すなわち、集合意識の形態学的決定に対する集合意識の他の意識による平行的決定の優位か否かの問題である。G. Namer はつづいて C. Bouglé の Les Idées égalitaires（1899年）の考察にはいるが、余白の関係でここでは削除する。ここでわれわれは Pickerling が問題してとりあげた問題、分類の未開形態と宗教生活の関連性の問題にとりくんでいくこになる。上述した理由によりここでも1902－1903年に年報[48]にとりあげた M. Mauss と Henri Hubert の共著「呪術に関する一般理論の草稿」'Esquisse d'une theorie générale de la magie' についても省略していく。

「分類の未開形態」は上記の H. Hubert と M. Mauss」の論文の一年前の年報に発表された。この論文もデュルケームとモースの共同執筆であるが、デュルケームの色彩が強く出ていることは争われない。ところで、この「分類の未開形態」[49] はこの論文が発表された頃問題となっていた Lévy-Bruhl の「未開社会の思惟」において展開された未開社会における思考の前論理性が近代社会の論理性と全く質的に異っているいるという主張に対する反論としてのべられたことが特徴である。M. Mauss は H. Hubert との共同論文[50]では未開社会の思想の範疇と近代思想のそれとは異質的でその間に連続性はないと主張していたが、デュルケームとのこの論文ではレヴィ・ブリュールの主張には還元されないという言説を認めているのである。「分類の未開形態」では未開思考の一面は事物の変化に対する信念であるが、レヴィ・ブリュールのいう融即（participation）の法則はこの未開人の精神的混同によって説明されるのであ

42) *Op. cit.*, p. 48
43) *Ibid.*
44) *Ibid.*
45) E. Durkheim, *Le socialisme*　これは1902年前後にかかれたものである。刊行はデュルケーム死後だが。
46) substrat social はまた形態学的基体ともよばれる。
47) *Philosphie et Sociologie* p. 43
48) G. Namer, *op. cit.*, pp. 49－50
49) *L'Année Sociologique*, Ⅶ（1902－03）（をここでは年報と略す）
邦訳「分類の未開形態」小関訳
50) Henri Hubert et Marcel Mauss, 'Esquisse d'une théorie générale de la magie' *Année Sociologique* Ⅶ (1902–1903)